

【成果概要】6-3. 熱中症発生要因の分析と熱中症予防行動の検討

注) 下記各図は、福岡市消防局救急搬送者データより作成した。

調査結果の概要

■ 平成29年度の成果

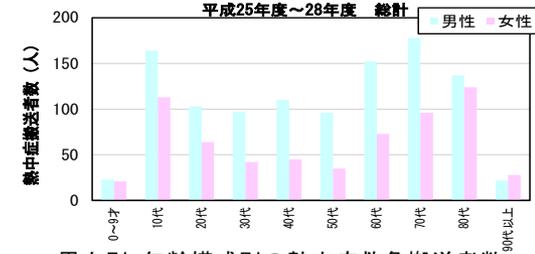
- 福岡市における小学校区別の熱中症救急搬送者データを分析し、傾向を既往知見と比較して特徴を把握したほか、搬送者数や人口あたりの搬送者率が経年的に高い小学校区の位置や、性別・年齢構成別の発生場所上位箇所など、福岡市における熱中症救急搬送状況の特徴を整理・把握した。また、将来の気候変動と、それによる熱中症リスクの増大を関連づけるため、熱中症救急搬送者数と気象要素(気温、WBGT)の関係式を導出した。
- 既存資料を用いて現況の人工排熱量を推計し、代表的な3地区(都心部、副都心、住宅地)を対象とする都市気温シミュレーションモデルを構築した。

■ 明らかとなった課題

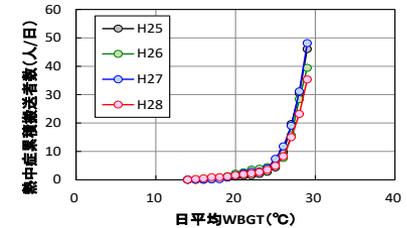
- 気象要素(気温、湿度等)及び暑さ指数の観測地点が福岡管区気象台の1地点のみであることから、地区別搬送者数の分布傾向と気象との関連性が十分に考察できず、また代表3地区の都市気温シミュレーション結果にみられる地区間の気温差等の妥当性を確認できなかった。
- 福岡市における熱中症救急搬送者データは、小学校区別の傾向分析等の細かな分析を行うにはデータ数が少なく、分布の特徴や人口構成との関連性を見出しにくい状況であった。

■ 平成30年度の調査計画

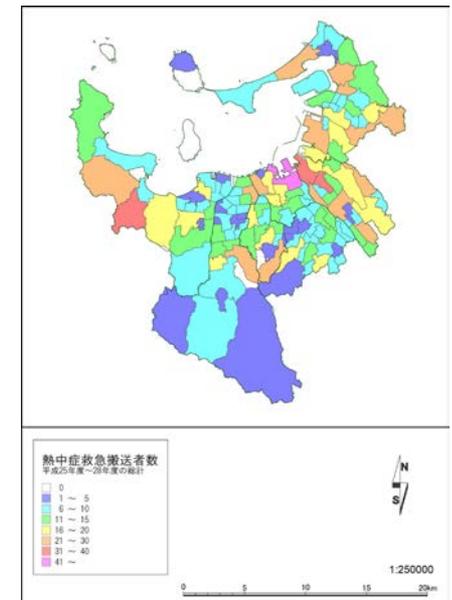
- 公共施設の敷地内など市内各所に温湿度ロガーを設置し、夏季及びその前後の期間にわたる気温等の現地連続観測を実施する。
- 都心部と住宅地など用途の異なる地区間の気温差を整理し、都市気温シミュレーション結果の妥当性を確認する。その上で、現在及び将来の気候シナリオ予測値を境界条件とする都市気温シミュレーションを実施し、将来の熱中症発生リスクの増大量を評価する。
- 現時点で未入手の直近の熱中症救急搬送者データを入手した上で、熱中症発生要因分析を継続する。



日平均WBGTと熱中症累積搬送者数の関係
年度間比較 出現日1日あたり



熱中症救急搬送者数と気象要素の関係整理例



校区別の熱中症救急搬送者数